

# 博士学位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

2018年3月16日

京都橘大学大学院  
文化政策学研究所

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条の  
規程による公表を目的として、平成 30 年 3 月 16 日に本学において  
博士の学位（文政博甲第 14 号）を授与した者の論文内容の要旨およ  
び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

# 目 次

## 【課程博士】

1. 西野 桂子            博士（文化政策学）            文政博甲第 14 号

学位論文題目：

音楽を活用した地域コミュニティの構築に関する研究

論文内容の要旨.....	4
論文審査の結果の要旨.....	8

氏名（本籍）      <sup>にし の けい こ</sup>  
西 野 桂 子      （ 京都府 ）

学位の種類      博士（文化政策学）

学位の記号      文政博甲第 14 号

学位論文題目

音楽を活用した地域コミュニティの構築に関する研究

学位審査委員	主査 教授	小森 治夫
	副査 教授	小暮 宣雄
	副査 教授	木下 達文

# 論文内容の要旨

## 目次

### 序章 研究の目的および方法

1. はじめに
2. 研究の背景
3. 研究の目的 —地域コミュニティ構築に対する音楽の有効性を明らかにする—
4. 先行研究の検討

### 第1章 地域における音楽ボランティア活動の社会的貢献

#### —音楽を活用した福祉コミュニティの活性化—

1. 社会課題の解決に貢献する音楽ボランティア活動の現状
2. 音楽ボランティア養成講座によって広がる音楽の福祉活動
3. 全国のボランティア・市民活動中間支援機関の実態調査と分析
4. 全国の中間支援機関における音楽ボランティアコーディネートと音楽ボランティア活動
5. NPO 法人音の風 音楽ボランティア派遣事業の事例
6. 音楽ボランティア活動がコミュニティに及ぼす影響
7. まとめ

### 第2章 障害者を取り巻く多様なネットワークから地域コミュニティの構築へ

#### —音楽イベント「スマイルミュージックフェスティバル」の事例の分析を通して—

#### はじめに

1. 障害者福祉の課題解決に貢献する分野横断の取り組み
2. 「SMF 地域にとびだせプロジェクト」で広がるコミュニティ
3. 教育機関との連携による福祉教育と笑顔の絵の取り組み
4. SMF に関わる多様な人びと
5. まとめ —ゆるやかなつながりの持続が地域コミュニティの構築に貢献—

### 第3章 音楽系 NPO 法人と地域コミュニティの構築—音楽イベントの継続と課題—

#### はじめに

1. 全国の音楽系 NPO 法人
2. 地域コミュニティの構築に貢献する音楽系 NPO 法人の事例
3. 「少年の祭典『ボレロ』1000 人の市民による大合奏・大合唱」の 31 年にわたる継続開催によって深まる地域コミュニティ

#### 4. 小括

### 第4章 地域に密着した音楽活動の拠点と地域コミュニティ

—京都市岡崎いきいき市民活動センターの事例から—

1. 京都市岡崎いきいき市民活動センター開所に至る経緯
2. 事例1 地域の拠点づくりから音楽イベントの開催へ
3. 事例2 岡崎わいわい文化祭  
—音楽イベントの企画運営を通して、地域の各種住民団体間のネットワーク形成や、地縁コミュニティとテーマ型コミュニティの融合を—
4. 地域活動に対する無関心層への音楽を通じたアプローチ
5. まとめ

### 終章 結論と残された課題

1. 本研究の成果
2. 残された課題と展望

## 論文の要旨

本学位請求論文は、文化芸術の一つである音楽を活用することが、地域コミュニティの構築にどのように寄与するかをテーマとして考察した論文である。とりわけ、音楽活動が、個人と個人とのつながりの創出や地域内の既存の小集団のネットワーク化、地域コミュニティのゆるやかなつながり形成に有効であることを明らかにすることを目的として、執筆されたものである。

序章では、研究の背景と先行研究を記述している。そのなかで、音楽を活用した地域コミュニティに関する研究が非常に少ないことを示すことにより、本研究の意義を明らかにするとともに、音楽のジャンルを問わないことと、音楽活動の主体を音楽系 NPO 法人にしぼったことを付記している。

まず、第 1 章では、音楽ボランティア活動により、地域活動の参加者層の拡大に貢献する一方、地域コミュニティ構築に向けては、福祉分野の枠を超えた多様な主体の連携が課題であることを示した。

第 2 章では、福祉分野の枠を超えた地域の多様な機関が連携して実施する音楽イベントと地域コミュニティとの関連について、本論文提出者が代表理事を務める NPO 法人音の風などが企画運営してきた「スマイルミュージックフェスティバル」を事例にして明らかにした。このフェスティバル活動を、通年の事業として実施することにより、それぞれのプロセスを通して、個人と個人の出会いを創出し広がり生まれることや、個人間や組織間の関係が深まっていることが示された。

第 3 章では、音楽系 NPO が担う地域コミュニティ構築への貢献事例として、NPO 法人トップピングイーストの「ほくさい音楽博」と NPO 法人あすなる芸術村の「少年の祭典『ボレロ』1000 人の市民による大合奏・大合唱」を取り上げ、地域の人びとへの丁寧な情報提供と年間を通じて開催される企画実施により、人とひとがゆるやかにつながり続けていることを明らかにした。しかしながら、事業の継続のためには、財源や担い手の確保という非営利民間活動の課題は残っている。主な財源は助成金や補助金、寄付金を中心であり、安定的な財源確保が課題として挙げられた。

第 4 章では、NPO 法人音の風が指定管理している「京都市岡崎いきいき市民活動センター」で行われている「岡崎わいわい文化祭」「アートパフォーマンス in OKAZAKI」「ゴスペルコーラス」「レコード図書館のレコードを聴く会」という音楽イベントを取り上げ、それぞれの来場者特性と音楽の特質（スタンダード、コモン、パーソナルの三層構造）との関係を明らかにした。すなわち、不特定多数を対象とした事業においては「スタンダード（演歌、ヒット曲、童謡等）」中心であるが、地域活動への無関心層へのアプローチとしては、「パーソナル・ミュージック（シカゴブルースや西海岸ジャズのような細分化されたジャンル）」や「コモン・ミュージック（ロックやジャズ、ゴスペル等大分類的ジャンル）」を意図的に活用している点が分析から明らかになった。

最後に、音楽を活用した地域コミュニティ構築には段階があり、ステップ1は個人と個人のつながり、ステップ2は各種住民団体内のネットワーク形成であること、そしてそれぞれの段階で活用する音楽が対応することを明らかにしている。

なお、残された課題と展望としては、地域コミュニティの問題に取り組む音楽系NPOの涵養や社会課題解決に向けた他分野との連携強化、音楽系NPOの組織基盤強化が挙げられている。



## 論文審査の結果の要旨

本学位請求論文は、文化芸術のうち音楽に着目し、その音楽活動を活用することで、地域コミュニティ構築に関し、どのような課題に対して、どのように有効であるかを考察した論文である。

そのために、本学位請求論文提出者が実践している、障害者福祉の推進を目的とした「スマイルミュージックフェスティバル」や、同提出者がセンター長を務める京都市岡崎いきいき市民活動センターの各種音楽イベントという具体的な事例、さらには、二つの音楽系NPO法人による地域コミュニティ構築貢献事例である「ほくさい音楽博」と「少年の祭典『ボレロ』1000人の市民による大合奏・大合唱」のフィールドワークを行い、音楽の活用による地域コミュニティ構築における有効性を検証している。

以下、2018年1月27日に実施された口頭試問について報告する。

はじめに、学位請求者から本学位請求論文について、特に主張したいこと、先行研究を超えて付け加えられた成果等が簡潔にしかも的確に述べられた。その後、3名の審査委員から、概ね次のような評価や意見が述べられた。

まず、3年間のうちにこのように整序された研究論文を書き上げたこと自体、素晴らしいことであり、しかも、豊富な事例研究をもとにして、一般理論化へと結びつけた手腕について高く評価できるという主査からの講評があった。

上記の総体的評価を前提としながら、審査員からいくつかの質問があった。その一つは成功しなかった事例についてである。それに対して、学位請求者は、スマイルミュージックフェスティバルにおいて、対象者にとって馴染みの薄いブルースを取り上げた際の負担過多の事例を挙げた。これは、コーディネーターの資質とも関係する論点であり、コーディネーターは、地域の人びとの音楽の嗜好や関心の方向をよく知り、自らが幅広い話題に対応するという能力が要求されるからである。

また、音楽の有効性、すなわち、①個人と個人とのつながりの創出、②地域内の既存の小集団のネットワーク化、③地域コミュニティのゆるやかなつながり形成に有効であること、の3つに対応する事例についての質問があり、それに対して適切な応答が行われた。

このように、審査委員3名は西野論文を高く評価したところであるが、改善すべき点や今後に残された課題がある。

第一は、終章の結論部分の論述についてであり、もう少しその研究成果を明らかにするためには丁寧な論述を行う必要がある。これは今後の出版の際に対処すべき点である。

第二は、音楽が果たす「ゆるやかなつながり」形成の研究を深めるために、マーク・グラノヴェッターの“The strength of weak ties”理論とその展開を掘り下げて、当該研究に役立てる課題である。また、このような音楽の活用による「ゆるやかなつながり」が具体的にどうすればコミュニティ構築に対し有効性を発揮するかについて、学位請求者によるさらなる実践的研究に期待するところである。

博士学位論文 内容の要旨および審査結果の要旨

発行 2018年6月7日  
発行者 京都橘大学大学院 文化政策学研究科  
607-8175 京都市山科区大宅山田町 34  
TEL 075-571-1111 (代表)